



i n d e c i s i v e

p r i n c e

今日も多分.....やっぱり来た。
俺の部屋の窓からなんの断りもなしに
彼女は軽々と枠を飛び越えて.....。

「お前か...勝手に入ってくるなって言ってるだろ？」

「だって家にいたって暇なんだもん」

たった今不法侵入をしてきたのが隣家に住む幼なじみの夏奈。隣に住んでいることを悪用していつも窓から堂々と侵入をしてくる困ったやつだ。

「それはお前の都合でだな。少しはこっちの都合も優先しろよな」

「べつにあんただって暇でしょ？ いいじゃない」

「よかねーよ。大体俺はお前と違って暇じゃないんだ。色々と忙しいわけで」

そうだ。どっかの誰かさんが来るから忙しくなるんじゃないか。

「私だって忙しいんだから！ 人を暇人呼ばわりしないでくれる？」

「いやさっき暇だから来たって言ってたやつがそれ言うか？」

「うるさい！ 細かいこといちいち気にしないの！」

「はあ.....まあいいや。それより何しに来たんだよ？ 理由がないのにわざわざ来るほど夏奈も暇じゃないんだろ？」

「特にこれといって用事があったわけじゃないんだけど...」

「じゃ帰れ」

「なんでよ！ いいじゃない少しくらい付き合ってくれたって」

つれないことを口にしていても俺はこういう時間に安らぎを覚えていた。少しでも長く続いて欲しかった。

「何に付き合えばいいんだよ？ 俺は暇じゃないって言ったばかりだろ」

「うん...、え...っとね...相談？」

「相談？ なんか悩んでることでもあったのか？ 私悩み事なんかありませんみたいな顔してるのに」

「あんたってホント口の減らない奴よね。いいから聞きなさいよ」

「...はいはい聞きますとも」

こういう強引なところは何年経っても直らないものなんだな。三つ子の魂なんとやられてやつか？

「それで相談っていうのはね.....ん？　なんかあんたの方が悩んでますって顔してない？」

は？　なんだ？　いきなりのことで面食らったじゃないか。別にそんな顔をしていた覚えがないんだが...。女の勘ってものは鋭すぎやしないか。

「俺か？　いや何も無いが」

「嘘。隠しても分かるんだから。私ともう何年の付き合いだと思ってるの？」

そういえばそうだったな。夏奈には隠し事なんかしたところで無駄だった。どうして人の心の中を見透かしたような芸当ができるんだろうか。

できることなら隠しておきたいことなんだけどな。ここはとりあえず白を切ってみるか。

「悩み事なんてないぞ、うん」

「それ本気で言ってる？　最近私と話す時変なの気付いてないとでも？」

いくらなんでもそこまで分かるのか？　これじゃどれだけ言い訳しても逃げられそうにないな。

「ああそうだよ。悩んでるさ。なんか文句でもあるか？」

「それならそうって言えばいいのに。それとも私に相談できないようなことなの？」

相談できないことだから相談しないんだろうが。それくらい察してくれ。

「そういうことだ」

「どうして！？　昔っからいつもそう。何でも1人で全部抱え込んで.....私に言ってくれたっていいじゃない？　そんなに信用できない？」

「信用できるとかできないとかの問題じゃなくてだな。単純に夏奈には言えないんだ」

「だから何だよ！？」

どうしても言えるわけないだろ。こんな状況で言えるほど根性がある男じゃないんだ。

「何でもだ。ただ今は言えないだけで...そう遠くないうちに言うことにはなるんだろうが」

「今じゃダメなの？」

「ダメだ。俺には色々足りないものが多すぎる」

たとえ今言えたとしても後悔しか残らないだろう。それじゃ駄目なんだ。

「...わかった。頑固なものも変わらないんだね。自分から言ってくれるまで待ってる」

「助かる」

「じゃあ私そろそろ帰るね」

「相談はいいのか？」

「いい。もう結論は出たから」

そう言い残して夏奈は入って来た道から自分の家へ戻って行った。たまには普通に玄関から入ってくれ.....。

夏奈がいなくなった部屋はもとの静寂さを取り戻していた。そして俺自身の心にもその静けさに対応するかのように虚無感で満ちていた。

もっとずっと一緒にいたい。そんな気持ちが溢れてくる。

実際に会っている時には感じることもないこの感覚。俺はいつからかこんな気持ちを覚えるようになっていた。特になにかがあつたわけじゃない。ただ思ったんだ。夏奈がいないと寂しいと。

その時には友達の抱くそれだとしか思っていなかった。誰だって友人と騒いだあとには一種の虚しさのようなものを感じるはずだから。でもそれは違うんだと気付いた。俺は寂しさとともに胸が高鳴るのを感じたんだ。

夏奈に対する気持ちに気付いてから俺は考えた。

この気持ちを伝えたらどうなるのかと。結論は2つ。幼なじみの関係から一步進むか、幼なじみとの関係にすら戻ることができなくなるかだ。

そして悩んだ。幼なじみのままなら一緒にいられる。俺が言わなければ関係を壊すことなく一緒にいることができる。

でもそれじゃ満足できない自分がある。幼なじみとしてじゃなく、1人の男性として見て欲しい自分が。

怖い。結果は2分の1の確率でしか起きないことは分かっている。ただその50%に賭けきれない。自信がなかった。夏奈は俺のことをどう思っているのか。単なる幼なじみとしてしか見ていないんじゃないか。当然俺と同じ気持ちでいる可能性だってあるはずだ。だがそんな可能性に賭けられるほど勇気があるわけじゃない。とんだ優柔不断だ。

だからさっき夏奈に聞かれたとき答えられなかった。答えてもよかった……でも勇気も覚悟も何にもない状態で言ったって後悔しか残らない。言わなきゃよかったって思うに違いない。

気付いてしまったからにはもう以前のような関係には戻れない。それに近いうちに言うなんて口走ったからには覚悟を決めて言うしかない。夏奈を失うことになっても……言わなきゃ気がすまない。むしろ言えば最悪の結果になったとしても案外平気かもしれない。いや、そればかりはなってみないとわからないか…。

ん？　そういえば夏奈の相談はなんだったんだろうか。帰り際に「もう結論はでたから」って言ってた気がするが……なんの結論が出たんだ？　これまでの夏奈の相談なんてなんの前置きもなかったから今回はよほどのことなんだろうが。……それなら俺は可能性に賭けてもいいのか？　もしかしたらただけどそんな脆い可能性に。どうせ失敗するならどっちに賭けても同じか。そういう事なら良いほうの方がいいよな。

答えは出た。あとは夏奈に伝えるだけだ。

俺は携帯を取り出し夏奈宛にメールを打つ。それはもう一方的なメールを。

『明日俺の部屋で待ってる』

——翌日

今日もいつものように来る彼女を待ちながら俺は思う。

夏奈は俺の心を飛び越えて、

俺は夏奈の心を飛び越えて、

その先に何があっても受け入れると。

「来たな」

「何よ。自分から呼び出しておいてその態度はないでしょ？」

「まあな。じゃ早速本題なんだが...」

「私忙しいんだから早くしてよね」

まず呼吸を整える。ここで噛みでもしたら格好がつかないからな。

「あのさ、俺.....やっぱいいや」

「何なのよ！ そんな風に言われたら尚更気になるでしょ？」

「夏奈」

「なに？」

「好きだ」

「はい？」

「だから...夏奈、お前が好きだ」

「...そんなことだろうと思った」

「なっ...！ お前まさか分かってて...」

やばい。動揺しすぎて思考が停止しかけてるな。とりあえず落ち着け.....。

「私もだよ」

「なんのことだ？」

「私も好き」

!!!

「……」

「私が相談するつもりだったけど、あんたがぎこちないのが気になったから鎌かけてみたの。そしたら案の定あの反応でしょ？ それで確信した。そうなんだから。だから気付いてもらえるような事言って帰ったの」

「お前…ハメたな？」

「人聞きの悪いこと言わないでよ。だから最初から言ってたじゃない。私も忙しいって」

【終】